

製品名: LKB1 (リン酸化 Ser334) ウサギポリクローナル抗体

カタログ番号: APRab04958

研究使用のみ

概要

説明	ウサギポリクローナル抗体
宿主	うさぎ
応用	IHC, ICC/IF, ELISA
反応性	ヒト、マウス
標識	非共役
修飾	リン酸化
アイソタイプ	IgG
クローン性	ポリクローナル
形態	液体
濃度	1mg/ml
保存	アリコートし、-20°Cで保存してください（12ヶ月有効）。凍結/融解サイクルを避けてください。
輸送	氷袋
バッファー	50% グリセロール、0.5% 保護タンパク質、0.02% 新タイプ防腐剤 N を含む PBS 液。
精製	アフィニティー精製

応用

希釈倍率 IHC 1:100-1:300, ICC/IF 1:50-1:200, ELISA 1:5000-1:20000

分子量

抗原情報

遺伝子名	STK11
別名	STK11; LKB1; PJS; Serine/threonine-protein kinase STK11; Liver kinase B1; LKB1; hLKB1; Renal carcinoma antigen NY-REN-19
遺伝子 ID	6794.0
SwissProt ID	Q15831
免疫原	抗血清は、Ser334 のリン酸化部位周辺のヒト LKB1 由来の合成ペプチドに対して作製された。アミノ酸範囲: 300-349

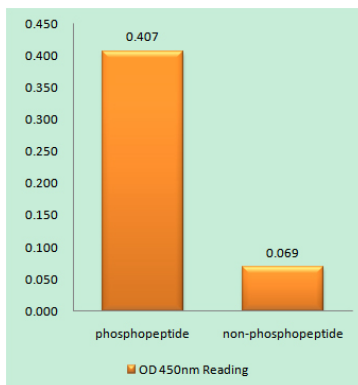
背景

セリン/スレオニンキナーゼファミリーのメンバーをコードするこの遺伝子は、細胞極性を制御し、腫瘍抑制因子として機能する。この遺伝子の変異は、消化管ポリープの増殖、皮膚や口腔の色素斑、その他の腫瘍を特徴とする常染色体優性遺伝疾患であるポイツ・イエガース症候群と関連付けられている。この遺伝子の選択的転写スプライスバリエントが観察されているが、詳細な特徴づけはされていない。[RefSeq 提供、2008年7月],触媒活性: ATP + タンパク質 = ADP + リン酸化タンパク質。補因子: マグネシウムまたはマンガン。疾患: STK11の欠陥は、ポイツ・イエガース症候群 (PJS) の原因である[MIM:175200]。PJSは、多くの臓器系に良性および悪性の腫瘍が発生しやすい、まれな遺伝性疾患です。PJSは常染色体優性遺伝疾患で、唇のメラノサイトーシス斑、多発性消化管過誤腫性ポリープ、および消化管癌を含むさまざまな腫瘍のリスク増加を特徴とします。疾患: STK11の欠陥は精巣腫瘍[MIM:273300]と関連付けられています。これには、胚細胞腫瘍 (GCT) または精巣胚細胞腫瘍 (TGCT) が含まれます。酵素調節: CAB39とSTRAD、またはCAB39とALS2CR2からなる複合体の結合によって活性化されます。機能: G1細胞周期停止に不可欠な役割を担います。AMPK関連サブファミリーのタンパク質キナーゼのメンバーをリン酸化および活性化します。腫瘍抑制因子。オンライン情報:PJS エントリー,PTM:cAMP 依存性プロテインキナーゼによってリン酸化される。類似性:プロテインキナーゼスーパーファミリーに属する。類似性:プロテインキナーゼスーパーファミリーに属する。CAMK Ser/Thr プロテインキナーゼファミリー。LKB1 サブファミリー。類似性:1つのプロテインキナーゼドメインを含む。細胞内局在:CAB39とSTRAD、またはCAB39とALS2CR2に結合すると細胞質に移動する。サブユニット:SMAD4、STK11、およびSTK11IPからなる三元複合体に存在し、SMAD4およびSTK11IPと相互作用する。組織特異性:普遍的に発現する。精巣と胎児肝臓で最も強く発現する。、

研究分野

インスリン受容体; mTOR; AMPK

画像データ



LKB1 (リン酸化 Ser334) 抗体を用いたリン酸化ペプチド (リン酸化左) および非リン酸化ペプチド (リン酸化右) 免疫原の酵素結合免疫吸着測定 (リン酸化 ELISA)